

島根県立大学出雲キャンパス  
紀要 第8巻, 9-18, 2013

# 成人看護学に外来化学療法実習を取り入れた 看護学生の学び

平野 文子・伊藤 奈美・坂根可奈子  
平塚 知子・奥野 映子\*1

## 概 要

がん患者の理解が深められることをねらいとして、成人看護学に外来化学療法の実習を取り入れた。本研究の目的は、外来実習による看護学生の学びを明らかにすることである。

看護系短期大学3年次生54名の実習後の学習レポートをデータとし、内容分析を行った。学生の学びは、「患者の理解」「看護の理解」「外来化学療法の理解」「社会資源の理解」の4領域に分類され、9カテゴリーを認めた。外来化学療法の実習は、がん患者の暮らしを具体的に理解する機会となり、「生活者」としての対象理解を深める教育方法の一つであると考えられた。患者を生活者として捉える視点を実習で活かせるような教育的支援の必要性が示唆された。

キーワード：外来化学療法, がん患者, 看護学生, 生活者

## I. はじめに

現在、我が国では入院によるQOLの低下や医療費の増大に対応するために、外来での治療があらゆる分野で推し進められている。実際に、病院の平均在院日数は31.2日、病床の種別では一般病床は17.5日（厚生労働省医療施設（動態）調査, 2012）と年々短くなってきている。このような医療状況の中で、外来化学療法は患者のQOLが維持できる治療法として主流になってきている。化学療法を受けながら在宅療養を行う患者には、様々な副作用に合わせて日々の生活を工夫するための能力が必要となる（坂井, 2010; 篠木, 2010; 川崎, 2011）。そのため、生活する地域の病院との連携など患者・家族の生活全体を視野に入れた継続した支援が必要となり、生活の場や環境の特性を早期に把

握するアセスメント力が求められてきている（森本, 2007）。

このように変化していく医療状況や対象のニーズに合わせて、看護基礎教育も現場に即した教育内容を取り入れていくことが必要となる。これまで本学の成人看護実習では、化学療法を受ける入院患者を受け持ちながら支援の方法を学んできた。しかし、近年、入院治療から外来治療へ移行となる患者を受け持つことが多くなってきた。そして、継続看護として学生が退院指導を行う機会が増えたが、生活の場や環境の特性を理解し、日常生活に密着した指導内容とはなかなかかなりにくい現状があった。

「生活者」ととらえる視点は、医療従事者にとって必要不可欠であり、看護の独自性を示す一つの重要な鍵であると言われてきている。しかし、看護の概念からの検討や要素の蓄積がまだ不十分な現状も指摘され（下村, 2003; 梶原黒江, 2006）、看護教育においても、「生活」や「生活者」に関する概念や技術を習得する学習方法

\*1 島根県立中央病院

が模索・検討されてきている。

本学においても、疾患を抱えながら地域で生活をしている看護の対象を「生活者」の視点で学ぶためには、学習方法の工夫が必要であると考へた。先行研究でも、学生は外来実習により対象理解を深め、看護の本質を学べると報告されている(小田, 2003; 梶原, 2005)。そこで、外来化学療法での実習を行う機会を設けることで、学習効果が期待できると考へ、導入した。

今回は、本学の成人看護学における外来化学療法の実習(以下、外来実習)を通して、学生は何を学んでいるのか、その学びを明らかにし、今後の学生指導のあり方について検討したいと考へた。本研究を行うことで、学生の外来実習に関わる基礎データが蓄積され、今後の指導体制や学生指導のあり方について示唆を得ることができ、教育資源として寄与できると考へた。

## Ⅱ. 研究目的

成人看護学における外来化学療法実習を取り入れた看護学生の学びを明らかにし、教育効果を検討する。

## Ⅲ. 外来化学療法実習の概要

この成人看護学では、慢性期または終末期の患者を受け持ちながら、2週間を通して看護の実践と看護過程の展開を学習することをねらいとしている。外来実習の概要は、以下のとおりである。

### 1. 実習目標

- 1) 外来で化学療法を受けるがん患者・家族の療養生活上の問題を理解する。
- 2) 外来で化学療法を受ける患者・家族の療養生活上の問題への対処方法を理解する。
- 3) 地域で暮らすがん患者の療養上の問題、化学療法を受けるがん患者に必要なセルフケアのための患者指導の内容・方法などを理解し、入院中の患者の看護に活かすことができる。

### 2. 展開方法

- 1) 実習初日に外来化学療法室の見学と施設の構造・機能・看護の概要などについて、外来の指導者(がん化学療法認定看護師)によるオリエンテーションを受ける(全員)。(写真1・2・3)



写真1 外来化学療法室



写真2 認定看護師によるオリエンテーション



写真3 外来化学療法室の見学

- 2) 化学療法を受けている患者を受け持つ学生は、実習開始より4～6日目に外来実習を2時間程度行う。担当患者については、実習前に外来の指導者より情報提供を受け、事前学習を行って臨む。

### 3) 実習の内容

実習目標および学習内容を外来の指導者に伝え、それに基づいて、患者へのインタビュー、観察・ケア(バイタルサイン測定、環境調整、副作用の早期発見、点滴刺入部の

観察など)を行う。

#### 4) カンファレンス

2週間実習の後半で、外来実習を行った学生を中心にカンファレンスの議題として取り上げ、学びの共有を実習メンバー全員で行う。

### 3. 外来実習の学習レポート

- 1) 事前学習の内容：①学習の目標 ②実習内容 ③薬剤の副作用 ④化学療法を受ける患者の看護問題（一般的な問題） ⑤外来で化学療法を受けるがん患者・家族の療養生活上の問題を理解するための視点
- 2) 事後学習の内容：学習目標に準じて、学習したこと・感じたことをA-4用紙に1枚程度にまとめ、3日以内に事前学習と共に教員に提出する。

## IV. 研究方法

### 1. 用語の定義

「生活」：人間の存在そのものであり、生ある限り止むことなく更新・展開される各個人の営み。この営みには、生命維持に直結する呼吸・循環・体温や生活リズムを作り出す運動・休息・食・排泄・清潔・衣、社会的活動としての遊びや学習を含む労働、精査に応じた活動や循環を内包する。また、営みを通しての個人の価値観や信条も含む。

「化学療法」：化学物質（抗癌剤）を用いて、癌細胞の増殖を阻害・破壊するなどの治療法で、癌の3大治療法の一つ。分子標的治療法も含む。

「学び」：知識の習得のみでなく、実体験としての経験から得た気づきや感動などの主観的要素も含む看護学生の学び。

### 2. 研究方法

#### 1) 対象

平成23年度の成人看護実習において外来実習を行った学生55名のうち、研究の協力で同意が得られた3年次生54名。

#### 2) データ収集方法

##### (1) 方法

- ・対象に研究目的、方法、倫理的考慮等を明示した依頼書をもとに説明し、回収箱を設

置して、同意書・学習レポートの提出をもって研究協力の同意が得られたと判断する。

- ・研究協力が成績評価に影響を与えないように、成績評価終了後に学生に説明・依頼を行う。

##### (2) データ

成人看護実習における学生の外来実習の学習レポートならびにカンファレンスの状況。

#### 3) 分析方法

- ・学生の外来化学療法実習の学習レポートをもとに、共同研究者と質的に内容分析を行う。
- ・記述を文脈として分析単位はセンテンスとする。それぞれの学生の学びに関する記述を抜き出し、センテンス毎の表現・意味内容の類似性に基づいて帰納的に分類、命名しカテゴリーを設ける。
- ・分類の信頼性に関しては、研究者間で一致するまでデータに戻り、内容の吟味と検討を繰り返す。
- ・上記の学びを学習目標に照らし、成果と課題を検討する。

#### 4) 倫理的配慮

A大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。研究の目的、方法、結果の扱い方、協力の自由意思、個人は特定されないこと、同意の有無が成績に関係しないこと、知り得た情報は厳重に管理すること等を明記し、実習評価後に文書と口頭で説明した。回収箱の設置による同意書の提出、および外来化学療法見学の学習レポートの再提出をもって研究協力の同意が得られたと判断した。

## V. 結 果

### 1. 外来実習で学生が関わった患者

54名の学生が関わった化学療法の治療を受けている患者は、男性32名、女性22名、年代は40歳代：4名、50歳代：9名、60歳代：15名、70歳代：19名、80歳代：7名であり、疾患は大腸・直腸癌、胃癌、肺癌、肝臓・胆道系癌、乳癌、子宮癌、卵巣癌、前立腺癌、膵臓癌等だった(表1)。

表1. 外来化学療法実習で学生が関わった患者

n = 54		
	内 容	人 数
性 別	男 性	32
	女 性	22
年 代	40 歳代	4
	50 歳代	9
	60 歳代	15
	70 歳代	19
	80 歳代	7
疾 患	大腸・直腸癌	18
	胃 癌	13
	肺 癌	6
	肝 臓・胆道系癌	4
	乳 癌	3
	子宮癌	2
	卵巣癌	2
	前立腺癌	2
	膵臓癌	1
	その他	3

## 2. 外来実習での学生の学び

外来実習を行った看護学生 54 名の記述内容からの学びは「患者の理解」「看護の理解」「外来化学療法の理解」「社会資源の理解」の4領域に分類され、9 カテゴリー、44 サブカテゴリーを認めた(表2)(領域は「」, カテゴリーは【】、サブカテゴリーは〈〉で表す)。

「患者の理解」の領域では、がんという診断を受けた時から、がん=死との認識もあり、治療の見込みが不確かな疾患であるために〈病気の受容には長い時間がかかる〉としながらも、〈生きがい治療の励みになる〉や長い経過や副作用を伴う治療が必要となるために〈病状をよく理解している〉や〈病気を前向きに考えて

表2. 外来化学療法実習による看護学生の学び

領 域	カテゴリー	サブカテゴリー
患者の理解	がんと共に生きる姿勢	病気を前向きに考えている
		病状をよく理解している
		病気の受容には長い時間がかかる
		生きがい治療の励みになる
	がんを抱え治療を続ける苦痛	再発や死への恐怖を抱えている
		病気の発見が遅れたことを後悔している
		自己管理していくことが負担である
		高額な治療費が負担である
		日常生活を制限される苦痛がある
	高いアドヒアランス	副作用症状の身体的な苦痛がある
		病気や治療に関する知識・認識力が高い
		治療・症状を自己管理していく力がある
地域で生活することへの思い	症状に対し、日常生活上で様々な工夫をしている	
	家族に負担をかけたくない	
	家族とともに過ごしたい	
	サポートしてくれる家族へ感謝している	
看護の理解	療養生活を支える 外来化学療法看護師の役割	社会生活における役割を果たしたい
		治療のために仕事をあきらめる悲しみがある
		短い時間の関わりでの観察・対応力が必要である
		不安の軽減に努める関わりが必要である
	退院後の生活に繋げる看護の役割	複数回にわたる関わりで信頼関係を築く
		患者が生活する上で必要とする知識・情報提供を行う
		身体症状の早期発見と対処が必要である
		社会資源に関する情報提供が必要である
		患者の個性を考慮した生活指導が必要である
		生活者の視点をもって関わる必要がある
外来化学療法の理解	外来化学療法のメリット	患者の思いに寄り添う関わりが必要である
		医師、患者と協働して退院後の生活を考える姿勢が大切である
		家族と共に生活を営みながら治療できる
		家族のサポートが受けられる
	外来化学療法のデメリット	家庭や地域での役割を果たしながら治療ができる
		生きがいや趣味などを楽しむことができる
		ベッド上でテレビを見ながら治療が受けられる
		自分の好みや体調に合わせた食事が食べられる
社会資源の理解	療養生活を支える社会資源	通院手段が不便な場合もある
		家族の理解・サポートが必要不可欠である
		緊急時の判断・対処能力が患者に求められる
		治療にかかる経済的負担が大きい
		検査・診察・治療に長い時間がかかる
		高額医療費制度の利用が助けになる
がん保険の利用が助けになる		
介護認定制度の利用が助けになる		
がん患者同士の支えが助けになる		
困ったときに相談できるサポートや制度が不十分である		

いる」とした【**がんと共に生きる姿勢**】について学んでいた。

また、〈再発や死への不安を抱えている〉や〈病気の発見が遅れたことを後悔する〉の心理的苦痛や治療によって〈副作用症状の身体的苦痛がある〉〈日常生活を制限される苦痛がある〉〈高額な治療費が負担である〉等の社会的・身体的苦痛を伴う【**がんを抱えながら治療を受ける苦痛**】についても学んでいた。

そのような苦痛を抱えながらも、日常生活の中で工夫しながら症状コントロールをしていくための〈病気や治療に対する知識・認識力が強い〉〈治療・症状を自己管理していく力がある〉等の【**高いアドヒアランス**】や、〈家族とともに過ごしたい〉〈社会生活における役割を果たしたい〉〈治療のために仕事をあきらめる悲しみがある〉という【**地域で生活することへの思い**】を持つ患者であることも挙がっていた。

「看護の理解」の領域では、副作用を伴う治療と生活の両立のためには、〈短い時間の関わりでの観察・対応が必要〉〈患者が生活する上で必要とする知識・情報提供を行う〉【**療養生活を支える外来化学療法看護師の役割**】の学びがあった。また、〈社会資源に関する情報提供〉〈患者が生活する上で必要とする知識・情報提供を行う〉とともに、それは〈患者の個性を考慮した生活指導が必要〉であり、患者の生きがい・価値観を尊重しながら〈生活者の視点をもって関わる〉〈医師・患者と協働して退院後の生活を考える姿勢〉という【**退院後の生活に繋げる看護の役割**】について学んでいた。

「外来化学療法の理解」の領域では、〈家族とともに生活を営みながら治療できる〉〈家庭や地域での役割を果たしながら治療ができる〉〈生きがいや趣味などを楽しむことができる〉等、自分の嗜好や体調に合わせたライフスタイルが選択できる【**外来化学療法のメリット**】とともに、〈通院手段が不便である〉等の【**外来化学療法のデメリット**】に関する学びも認めた。

「社会資源の理解」の領域では、〈高額医療費制度の利用〉〈がん保険の利用〉が助けになる等、高額な医療費を負担しながら暮らしを維持していくための【**療養生活を支える社会資源**】の重要性やその資源が十分でない現状について学ん

でいた。

カンファレンスの中では、外来患者の退院後の日常生活状況や具体的な悩み・取り組み等の質疑応答があり、上記の学びに繋がる意見が多く認められた。現在、入院中の受け持ち患者に対して、外来での学びを退院指導に活かしていくことの必要性やその具体例が述べられていた。

## Ⅵ. 考 察

外来実習による学生の学びは、4領域、9カテゴリー、44サブカテゴリーから形成されていることが明らかになった。ここでは、学生の学びの様相と外来の実習目標の達成状況について述べる。

### 1. 外来実習からの学生の学びの様相について

学生の学びは、「患者の理解」「看護の理解」「化学療法室の理解」「社会資源の理解」の4領域、9カテゴリー：【**がんと共に生きる姿勢**】【**がんを抱えながら治療を受ける苦痛**】【**高いアドヒアランス**】【**地域で生活することへの思い**】【**療養生活を支える外来化学療法看護師の役割**】【**退院後の生活に繋げる看護の役割**】【**療養生活を支える社会資源**】【**外来化学療法のメリット**】【**外来化学療法のデメリット**】【**療養生活を支える社会資源**】を認めた。

化学療法を行う患者は、がんという死をも連想させる疾患を持ちながら、副作用を伴う治療、それも完全治癒に至るか確証のない中での治療を数か月も繰り返し行う。そのような特徴が顕著な外来化学療法患者と接することで、学生は身体的苦痛や精神的苦痛、経済的負担などの社会的苦痛を伴う「患者の理解」に繋げていたと考える。

また、化学療法を受ける患者は副作用症状へのセルフマネジメントすることが求められる。さらに、外来治療の場合、日常生活を送りながら治療を行うことで、入院生活と比較するとより強く生活への影響が乗じる。そのために学生は、これらの特徴を【**がんと共に生きる姿勢**】【**がんを抱えながら治療を受ける苦痛**】、〈日常生活上で様々な工夫をしている〉【**高いアドヒアラ**

ンス】や〈社会生活における役割を果たしたい〉等の【地域で生活することへの思い】として学ぶことができたと考える。生活への影響が大きいことは、〈患者が生活する上で必要とする知識・情報提供を行う〉【療養生活を支える外来化学療法看護師の役割】の理解や、〈患者の個別性を考慮した生活指導が必要〉であり、〈生活者の視点をもって関わる〉〈医師・患者と協働して退院後の生活を考える姿勢〉という【退院後の生活に繋げる看護の役割】の「看護の理解」にも繋がっていたと考える。

「看護の理解」や、「外来化学療法の理解」の領域では、〈家庭や地域での役割を果たしながら治療ができる〉〈生きがいや趣味などを楽しむことができる〉等の患者の生きがい・価値観に関する理解も示していた。その生活状況が患者のQOLと直結している外来化学療法患者と直に接することで、日常の営みを通しての個人の価値観や信条も生活者の視点として学べることが伺える。

そして、治療そのものが正しく日常の営みそのものである外来治療の語り一つひとつ聞くことで、〈高額医療費制度の利用〉〈がん保険の利用〉が助けになる等、暮らしを維持していくための【療養生活を支える社会資源】の重要性や現状についても学ぶことができたと考えられた。

本学の学生は、1年次の学習で家庭訪問実習を行い、生活者の視点を学ぶ機会がある。生活者を理解する視点は、日常生活動作や健康状態、生活状況を水平的に捉える視点と、過去から未来へと経時的に変化する存在として価値観や生き方、生活習慣などを捉える両者の視点としている（吾郷：2009）。しかし、病院実習ではその視点に違いを生じ、病気を持つ人（体）としての理解に留まりがちであることが指摘されている。

生活者の視点とは、何を示すのか、曖昧な記述もあり、今後学生の視点を強化する関わりが必要である。そのためには、学年進行に応じた生活者の視点が育まれるよう、教育方法や環境の検討が求められる。まずは、外来化学療法患者のように、治療と生活の両立が患者のQOLに直結するような教材の選択もその一つの方法で

あると考える。

## 2. 実習目標の達成状況について

外来実習の実習目標は、1) 外来で化学療法を受けるがん患者・家族の療養生活上の問題の理解、2) 外来で化学療法を受ける患者・家族の療養生活上の問題への対処方法の理解、そして、3) 地域で暮らすがん患者の療養上の問題、化学療法を受けるがん患者に必要なセルフケアのための患者指導の内容・方法などを理解し、入院中の患者の看護に活かすことができる、である。（表2）の結果から、目標1)の外来で化学療法を受けるがん患者・家族の療養生活上の問題の理解、や2)の療養生活上の問題への対処方法の理解はできていることが伺えた。

これは、外来という場で病衣姿ではなく、私服姿の患者から、現在どのような生活を送っているのかについて、インタビュー（対話）をすることによって、より生活者という視点を意識することが可能になったからだと考える。また、化学療法は、嘔気や感染・出血傾向等の様々な副作用を伴うため、副作用への対処方法、すなわちセルフケアの状況を主に話題とすることが多く、生活に治療をどう組み込んで自己管理をしていくのか、患者の日常生活上の実践能力に触れる機会となっていたことも影響していたと思われる。受持患者はいずれ外来治療に向かうということで、学生はそのための支援の内容・方法を学んでいる真っ最中であること、事前学習をして臨んだことも、学びを促すことに繋がったと考える。

「生活者を理解する力」に「コミュニケーション力」が強く影響する（吉川：2009）とあり、梶原や武居は（梶原，2005；武居，2007）、外来で短時間でも対象者と接することにより、限られた時間の中でも多くの学びを得ると報告をしている。本研究でも同様の結果であった。学生は対話を通して、目の前で化学療法を受けている患者が語る現実を、今、正に現実として感じることができる。患者との対話は、思考や行為を動機づける経験となり、理解を促進することに繋がる（浅井，2007）。今回も患者へのインタビューを行うことで様々な発言が引き出され、それが経験を通じた知識の獲得となり、外

来実習は、地域で生活する患者の身体・心理・社会面を理解することにつながったと考える。

3)の地域で暮らすがん患者の療養上の問題、化学療法を受けるがん患者に必要なセルフケアのための患者指導の内容・方法などを理解し、入院中の患者の看護への活用については、活用の必要性をカンファレンスで共有することができていた。入院中の受け持ち患者に活用した学生もいたが、活用に至らなかった場合、看護計画の追加として反映していることを認めた。今後、さらに多くの活用としていくためには、カンファレンスでの学びの具体化や深まりを進めていくことが重要である。

がんも慢性疾患として位置づけられており、さらに生活の再調整を意識するような事前学習やカンファレンステーマとしていくことでより効果的な外来実習にしていくことができると考える。学習レポートには、認定看護師のコメント記載もしているが、カンファレンスに認定看護師の同席も進めていきたい。

外来化学療法実習は、がん患者の暮らしを具体的に理解する機会となり、「生活者」としての対象理解を深める教育方法の一つであると考えられた。今後は、患者を生活者として捉える視点を実習で活かせるような教育的支援の必要性が示唆された。

## Ⅶ. 本研究の限界と今後の課題

外来実習を行った一部の学生によるデータであり、また一施設での限られた環境での結果であることから、一般化には限界がある。今後、継続してデータを蓄積していくこと、がん患者の背景等との関係や、学年進行に伴う学生の学びについても明らかにしていくことが必要である。

## Ⅷ. 結 論

成人看護学に外来化学療法実習を取り入れた看護学生の学びと成果について検討した結果、以下のことが明らかになった。

1. 学生の学びは、「患者の理解」「看護の理解」

「外来化学療法の理解」「社会資源の理解」の4領域に分類され、9 カテゴリー：【がんと共に生きる姿勢】【がんを抱えながら治療を受ける苦痛】【高いアドヒアランス】【地域で生活することへの思い】【療養生活を支える外来化学療法看護師の役割】【退院後の生活に繋げる看護の役割】【療養生活を支える社会資源】【外来化学療法のメリット】【外来化学療法のデメリット】【療養生活を支える社会資源】を認めた。

2. 外来実習は、がん患者の暮らしを具体的に理解する機会となり、「生活者」としての対象理解を深める教育方法の一つであると考えられた。患者を生活者として捉える視点を実習で活かせるような教育的支援が必要である。

## 文 献

- 吾郷ゆかり, 吉川洋子, 松本玄智江, 他 (2009): 基礎看護教育における「生活者を理解する視点」—家庭訪問実習と病院実習後の自己評価より—, 島根県立大学短期大学紀要, 3, 77-83.
- 浅井直美, 小林瑞枝, 荒井真紀子, 他 (2007): 看護早期体験実習における学生の意味化した経験の構造, Kitakanto Med J, 57, 17-27.
- 梶原恭子, 富安俊子, 井手信 (2005): 母性看護外来実習における看護学生の学びの検討, 母性衛生, 46 (2), 249-256.
- 川崎優子, 内布敦子, 荒尾晴恵, 他 (2011): 外来化学療法を受けているがん患者の潜在的ニーズ, 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要 18, 35-47.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと, 三宅薫, 他 (2006): 看護学における「生活者」と言う視点についての考察, 看護研究, 39 (5), 3-9.
- 厚生労働省医療施設(動態)調査 (2012): <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/12/>
- 森本悦子, 三平まゆみ, 高雄知子 (2007): 地域生活を基盤とする外来がん化学療法を受ける患者への継続看護支援, 山梨看護雑誌, 5 (2), 47-51.
- 小田和美, 田中克子, 北村直子, 他 (2003):

成熟期看護学実習の外来実習における学生の「看護」－目標到達度からみた自習方法の課題と方向性，岐阜看護県立看護大学紀要，3（1），95-101.

坂井田笑子，大西和子，辻川真弓（2010）：外来化学療法を受けるがん患者のケアプログラム試案の作成 患者の困難や苦悩とニーズに焦点を当てて，三重看護学誌，12，67-80.

篠木貴子（2010）：外来化学療法患者が抱く不安の実態と看護支援の課題 通院治療センター開設後の1年半を顧みて，成田赤十字病院誌，12，59-62.

下村裕子，河口てる子，林優子（2003）：看護が捉える「生活者」の視点 対象理解と行動変容の「かぎ」，看護研究，36（3），25-37.

武居明美，佐名木宏美，辻村弘美，他（2007）：外来継続看護実習におけるがん化学療法が患者に及ぼす影響に関する学生の学び，群馬保健学紀要，28，19-30.

吉川洋子，松本亥智江，吾郷ゆかり，他（2009）：生活者の理解に向けた基礎看護実習の教育方法と評価，島根県立大学短期大学紀要，3，51-59.



# Student Nurse's Learning in Outpatient Chemotherapy of Adult Nursing Practice

Fumiko HIRANO, Nami ITO, Kanako SAKANE,  
Tomoko HIRATSUKA and Eiko OKUNO\*<sup>1</sup>

**Key Words and Phrases** : Outpatient Chemotherapy,  
Cancer Survivor, Nursing student, People

---

\*<sup>1</sup> Shimane Prefectural Central Hospital

平野 文子・伊藤 奈美・坂根可奈子・平塚 知子・奥野 映子